は じ め に

市では、新型コロナウィルス感染症の５類感染症への移行に伴い社会経済活動がコロナ禍前に戻りつつある一方で、原油や物価の高騰により地域経済が不安定な状況が続く中、人口減少と少子高齢化への対応や持続可能なまちづくりに資する取組を推進しています。

教育の分野におきましても、少子化の進行により、学校統合や中学校の部活動の地域移行に向けた取組を進めていますが、情報化やグローバル化が急速に進み変化する社会の中で市民が心豊かに暮らし続けられるまちづくりのために、教育が果たす役割が大きくなっています。

こうした状況を踏まえ、本市教育委員会におきましては、大船渡市総合計画2021及び大船渡市教育振興基本計画に基づき、「豊かな心を育む人づくりの推進」を基本に、市長部局との連携を図りながら、大船渡市教育大綱に掲げる理念の下、学校教育、生涯学習、伝統文化の継承などの諸施策を積極的に展開してまいります。

特に、新しい時代を切り拓き社会の担い手となる子どもたちが、郷土に愛着と誇りを持ちながら心身ともに健やかに成長し主体的に社会に関わっていけるよう、学校教育の充実を図るとともに、家庭・学校・地域の連携と協働の取組による地域教育力の向上に努めてまいります。

本書は、当市教育行政の概要、現状について「大船渡の教育 №52 令和６年度版」としてまとめたものです。ご高覧いただき、本市教育の進展のため、ご指導いただければ幸甚に存じます。

令和７年３月

大船渡市教育委員会
教育長　小　松　伸　也

大船渡市民憲章

昭和58年６月１日制定

わたくしたちの大船渡市は、三陸の美しい自然のなかで、先人のたゆまぬ努力により、恵まれた港を中心に発展してきたまちです。

わたくしたちは、このかけがえのないふるさとを受けつぎ、市民としての自覚と誇りをもって、明るく豊かな未来をひらくため、ここに市民憲章を定めます。

わたくしたちは、

1　学ぶ心を大切にし、香り高い文化のまちをそだてます。

1　働く喜びをもち、健康で活気あるまちづくりにはげみます。

1　明るい家庭をつくり、希望と安らぎのあるまちをきずきます。

1　社会のきまりを守り、安全で住みよいまちづくりをめざします。

1　恵まれた自然を生かし、海と緑の美しいまちをつくります。

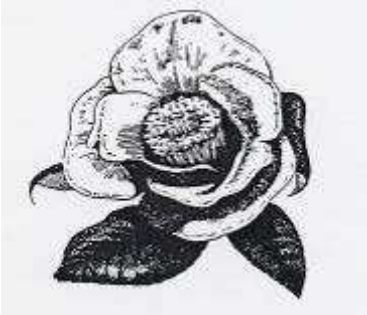
大船渡市のシンボル

市　章

美しい山々と豊かな海に囲まれたまち、大船渡。

市章は、大船渡の「大」の字を波と山でデザイン化した。

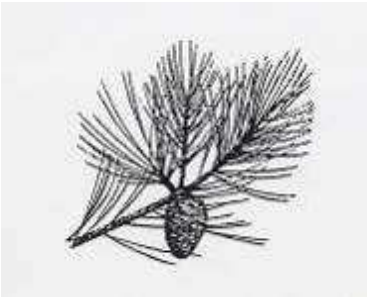
市の花＜つばき＞



碁石や長崎海岸など、暖地に多く自生する「ヤブツバキ」のことである。

寒さをしのいで美しい深紅の花を咲かせ、北国岩手の春をいち早く告げる。ふるさと大船渡の人々の心に、うるおいと豊かさとをあたえてくれる。

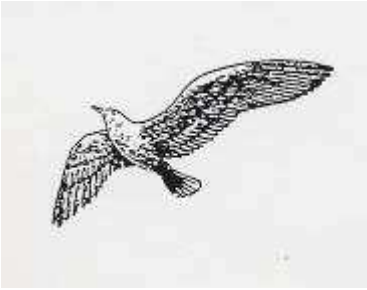
市の木＜まつ＞



海岸の岩などにみられる「クロマツ」内陸に多い「アカマツ」五葉山などに生えている「ゴヨウマツ」を指すものである。

ともに大地に深く根をおろし、枝をひろげ、常に緑色濃く、風雪に耐えている姿は活力に満ち雄々しい。

市の鳥＜うみねこ＞



港や岬などに生息している留鳥で、当地方で「カモメ」と呼んでいる鳥のほとんどがこの「ウミネコ」である。鳴き声が「ネコ」に似ているところからこの名が生まれた。

青い海に飛び交う白い姿は、港の空に明るい希望を描いている。

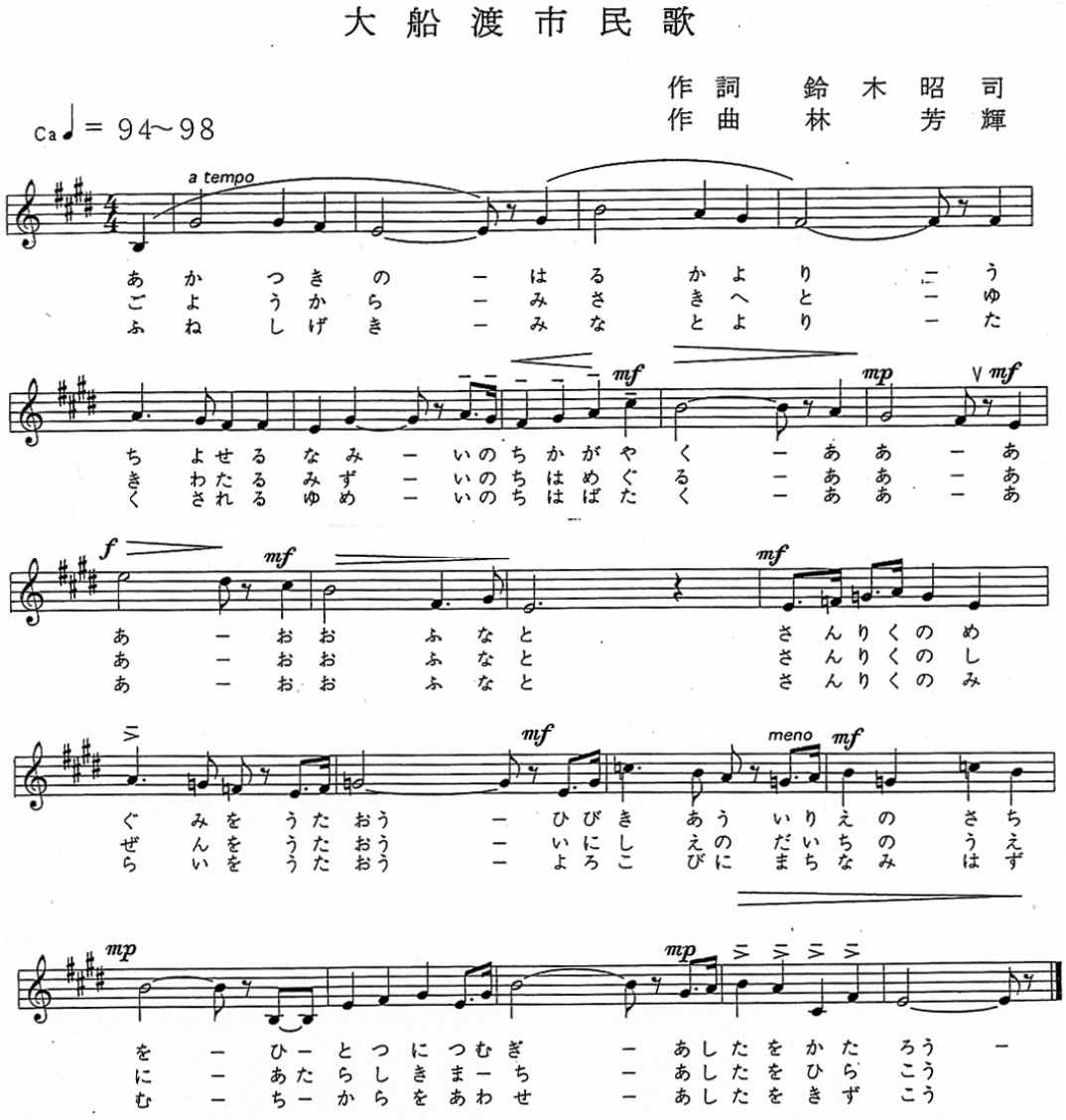
大船渡市民歌

作詞　鈴木昭司
作曲　林　芳輝

一、
暁の　遥かより
打ち寄せる波　生命(いのち)かがやく
ああ　大船渡
三陸の　恵を謳(うた)おう
響きあう　入り江の幸を
一つに紡(つむ)ぎ　明日(あした)を語(かた)ろう

二、
五葉から　岬へと
行きわたる水脈(みず)　生命(いのち)はめぐる
ああ　大船渡
三陸の　自然を謳(うた)おう
いにしえの　大地の上に
新しきまち　明日(あした)を拓(ひら)こう

三、
船しげき　港湾(みなと)より
託される夢　生命(いのち)はばたく
ああ　大船渡
三陸の　未来を謳(うた)おう
歓びに　町並み弾(はず)む
力を合わせ　明日(あした)を築(きず)こう



目　次

はじめに 1
大船渡市民憲章 2
大船渡市のシンボル 3
大船渡市民歌 4
目次 5

大船渡市の概況 *7*

位置・面積・気候 8
総人口・世帯数 8
大船渡の歩み　― 日本列島の誕生から現代へ 8

教育行政 *11*

大船渡市教育委員会・市長部局関係課等　行政組織図 13
教育委員 14
令和６年度大船渡市教育行政の運営に関する基本方針 15
基本方針と施策の体系 19

学校教育 *21*

学校教育の行政組織図 23
学校教育・学校教育施設の体系図 24
学校教育方針と事業計画 25
小学校・中学校の教育目標等 28
大船渡市教育研究所 45
学校給食 49

生涯学習・社会教育 *55*

生涯学習・社会教育の行政組織図 57
生涯学習・社会教育の体系図 58
生涯学習・社会教育行政の事業計画 59
大船渡市立中央公民館 63
大船渡市立三陸公民館 67
大船渡市立盛地区公民館 68
大船渡市立大船渡地区公民館 69

大船渡市立末崎地区公民館 70
大船渡市立赤崎地区公民館 71
大船渡市立蛸ノ浦地区公民館 72
大船渡市立猪川地区公民館 73
大船渡市立立根地区公民館 74
大船渡市立日頃市地区公民館 75
大船渡市立綾里地区公民館 76
大船渡市立越喜来地区公民館 77
大船渡市立吉浜地区公民館 78
大船渡市立図書館 79
大船渡市立博物館 82

資　料 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ *資-1*

歴代の教育委員 ..... 資- 3
施設及び各種委員等 ..... 資- 5
教育財政 資-16
教育施設等 資-19
学校学級編成及び教職員数一覧 資-27
生涯学習・社会教育施設及び事業等の利用状況 資-32
体育施設利用状況 資-37
学校保健 資-38
指定文化財等 資-42
災害応急対策 資-49
教育機関等位置図（大船渡地区） 資-53
教育機関等位置図（三陸地区） 資-54

教育関係団体等の活動 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ *付-1*

公益財団法人大船渡市育英奨学会 付-3
気仙地区教育委員会協議会 付-6

大船渡市の概況

位置・面積・気候

大船渡市の位置は、北緯39度4分55秒、東経141度42分31秒である。

岩手県南東部の太平洋岸に位置し、市界は北側で釜石市、西側で気仙郡住田町、南側で陸前高田市に接する。面積は、322.51km^2。

三陸復興国立公園や県立自然公園など自然に恵まれ、冬期でも積雪はほとんどみられない。

総人口・世帯数

総人口　：　32,476 人
世帯数　：　14,719 世帯　（令和6年3月31日現在）

大船渡の歩み　— 日本列島の誕生から現代へ

大船渡の大地の歴史は、４億２千万年前の古生代シルル紀中頃にさかのぼる。発見される化石から、当時、サンゴ・三葉虫・腕足貝などのすむ、暖かく、穏やかな海であったと推定されている。大船渡は、古生代、中生代、新生代にわたる各時代の地層がみられる日本でも極めて稀有な地域で、そこから発見される化石群によって、日本列島の形成を知る上での重要地域として世界的に有名である。

大船渡の大地に登場した縄文時代(約１万年～2,200年前)の人びとは、沖合いで黒潮と親潮がぶつかる豊かな三陸の海に、生活の糧を見いだした。蛸ノ浦貝塚・大洞貝塚・下船渡貝塚など大船渡湾岸に数多く分布する貝塚遺跡からは、骨角製のツリバリやモリなどの漁具、食料とした貝や魚の骨が発見され、縄文人と海との密接な関わりを伝えている。これらの貝塚遺跡は学術的に貴重で、国の史跡に指定されており、現代・水産日本の基礎が確立された地域として評価されている。

大船渡市を中心とする気仙地方。この「気仙」の地名は、古代において、「日本後紀」などの歴史書にみられるが、その範囲は明確ではない。現在の気仙地方より、はるかに広大な地域を表わしていたものと考えられている。平泉・藤原氏の時代には、その黄金文化を支えた産金の地であったという伝説が残されており、気仙地方には古代から近代までの多くの産金跡が分布している。

中世において、気仙郡は、地頭となった葛西氏に支配され、猪川町中井や赤崎町山口の周辺に残る追善供養の石碑・板碑(石塔婆)から、当時この地域での有力者の存在がうかがえる。近世には、葛西氏から伊達氏の支配に代わり、そして太閤検地により気仙郡はほぼ現在の範囲に定められた。伊達氏は大肝入の役職を設け、気仙郡を統治させた。

江戸幕府が倒れて明治政府が成立すると、気仙郡は明治４年の廃藩置県で江刺県に編入され、以後、一関県・水沢県・磐井県・宮城県・岩手県と所轄が移った。明治12年になり、盛町に気仙郡役所が設置され、気仙地方の行政・経済・文化などの中心となっていった。明治14年には、軍艦「雷電」が大船渡湾へ入港し、港湾としての重

要性が注目され、港湾開発が進展することとなった。

明治29年と昭和8年には、三陸大津波の大災害を被りながらも復興に努力し、戦後、昭和27年に岩手県沿岸南部の拠点都市を目指して、盛町・大船渡町・末崎村・日頃市村・立根村・猪川村・赤崎村の2町5村が合併し、「大船渡市」が誕生した。翌28年には、国から臨海工業モデル地区に指定され、天然の良港「大船渡港」を活用して着実に発展してきた。さらに平成6年に三陸地方拠点都市地域に指定されるなど、大船渡市は三陸沿岸地域の拠点都市として、産業・経済・教育・文化・医療などの機能を担っている。

平成13年11月には、三陸町と合併し「新生・大船渡市」が誕生した。

三陸町は、昭和31年、綾里村・越喜来村・吉浜村の3村が合併して「三陸村」となり、昭和42年には町制が施行された。以後、水産業を基幹産業としながらも、昭和40年代には、東北大学理学部三陸地殻変動観測所、気象庁気象ロケット観測所、東京大学三陸大気球観測所、北里大学水産学部（現海洋生命科学部）などの学術研究施設が設置され、水産と科学のまちとして歩んできた。

平成14年に市制施行50周年を迎え、平成17年３月には、三陸縦貫自動車道「大船渡三陸道路」が、平成21年３月には、「高田道路」が開通し、高速道の整備が進められているほか、平成20年11月には、大船渡市発足当時からの念願であった市民文化会館（リアスホール）が竣工し、さらに、大船渡湾内には永浜・山口地区多目的国際ターミナル岸壁が平成21年2月に完成するなど、生活や産業の基盤整備を図りながら国際港湾都市としてのまちづくりを進めてきた。平成22年は、「気仙」の地名が歴史書に登場して1200年を迎える節目の年となった。

平成23年3月11日に東日本大震災が発生し、津波により沿岸部は未曾有の被害に見舞われた。人的被害はもとより、住宅や漁港・水産加工業の施設、商店街などが流失し、JR大船渡線と三陸鉄道は不通となったが、令和２年度までの10ヵ年を計画期間とする大船渡市復興計画に基づき、市民生活と産業基盤の復旧・復興に取り組んだ。

教育の分野では、平成28年11月に越喜来小学校、平成29年4月には赤崎小学校、赤崎中学校が落成式を行い、被災した３校全てが再建された。また、平成29年８月には、校庭から応急仮設住宅が撤去され、全ての校庭の供用が再開された。これをもって、平成29年８月31日、大船渡市学校施設環境復興宣言がなされた。

さらに平成30年11月、三陸町吉浜地区に200年ほど前から伝わる小正月の伝統行事「吉浜のスネカ」が、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録された。

令和２年３月には、越喜来中学校、吉浜中学校、日頃市中学校が閉校し、第一中学校に編入された。令和３年４月には、赤崎中学校、綾里中学校が統合し、東朋中学校が開校された。

令和４年に市制施行70周年を迎え、東日本大震災からの復興にご支援いただいた企業、団体等に感謝状の贈呈を行った。

令和５年３月には、第一中学校校舎及び屋内運動場が竣工し、令和５年度より新校

舎での授業が開始された。また、令和５年度に旧校舎解体とグラウンド等の整備を行い、令和６年３月に落成式を行った。

令和５年度に、大船渡・末崎地区学校統合推進協議会を設置し、大船渡中学校と末崎中学校の統合について協議を行った。令和６年度末で両校を閉校し、令和７年４月に大船渡中学校を開校することとなった。

令和６年３月に、当市日頃市町樋口沢周辺の中里層とよばれる化石産地（古生代前期デボン紀　約4.1～3.9億年前）から、日本最古となる植物化石が発見された。